

# 海上胤平『詠史百首評論』

—— 翻刻と解題 ——

鈴木 亮

## 【解題】

一

徳川時代後期、我が国に於ては、歴史上或いは伝説上の人物を題として詠ずる詠史和歌が、詠史詩の盛行に拮抗する形で大いに流行してゐた。<sup>(1)</sup>その理由としては、「国学者による歴史研究の成果や、画贊の中に歴史的人物を描いたものがあり、詠史的なものが徐々に詠まれるようになった」といふ二点が指摘せられてゐる。『鴨川集』『鰯玉集』といった当代を代表する類題和歌集には詠史の部が設けられ、可なりの数の歌が収録せられてゐるし、又、長澤伴雄編『詠史歌集』（嘉永六年刊）、村上忠順編『詠史河藻歌集』（文久二年刊）と詠史和歌のみを蒐めて一書を編むといふ試みも為されてゐる。さうした時代に、江戸派の国学者歌人加藤千浪（文化七年～明治十年）は、詠史

和歌を二百首詠み、『詠史和歌』『続詠史和歌』（ともに刊年未詳）の二冊に百首づゝを収めて上梓した。<sup>(3)</sup>

加藤千浪は、『明治現存三十六歌撰』（山田謙益編、明治十年刊）の巻頭三条西季知に続いてその詠が採られるなど、当時なかなかの評判の歌人であつた。書に巧みで、中島歌子・伊東祐命らの師としても知られてゐる。その歌、書に關しては、本居内達の男豊頼によつて、

歌はみづから得たる一つのしらべをなして、小簾の外山の春の月、えむにうるはしくふりはらふ袖の涙、哀にかなしき言の葉ども多かり。水くきのあと、はた、萩の下水の流れきよく、なつかしかりければ、其をしへをうけ、その筆の跡をこふ人、高きみじかき、遠き近き、日毎に其門になむ集ひける。

と称讚せられ、井上文雄（寛政十二年～明治四年）とともに江戸派の殿を飾つた歌人なのだが、千浪の『詠史百首』の詠みぶりは好ま

しくないと、加納諸平門の国学者歌人海上胤平はそれに異を唱へ、  
 此処に紹介する『詠史百首評論』を著したのであつた。

## 二

「明治の和歌の歴史を見るためには、たどつて行かなければならぬ人」<sup>⑤</sup>といふ評があるにもかゝらず、今日に於てはなほざりにせられてゐるに等しい歌人の一人と言つても良いであらう海上胤平は、  
 文政十二年(一八二九)十二月三十日、下総国海上郡三川村(現、  
 千葉県旭市三川)に、父賢胤、母奈賀の三男として生れた。幼名を  
 猪之助といひ、のち正胤、柿園加納諸平に入門後は胤平と改名する。  
 通称を六郎、権園と号した。海上家は、下総の武将千葉常胤を祖と  
 してゐる。

胤平、幼にして神童と称せられ、弘化二年(一八四五)、剣術を学  
 ぶべく十七歳にして江戸に出て、剣術家、北辰一刀流の創始者千葉  
 周作の内弟子となる。嘉永二年(一八四九)からは諸国を遍歴し、  
 同七年周作の推輓により、紀州藩の剣術指南役をつとめ、同藩国学  
 所教授加納諸平と出逢ひ、諸平に師事することとなつた。諸平は夏  
 目麁磨の息にして、本居大平に学んだ国学者歌人である。『類題和歌  
 鏡玉集』を編輯刊行し、徳川時代後期の歌壇を牽引してゐた一人と  
 言ふことが出来よう。『南山踏雲録』をものした幕末勤王の志士、伴  
 林光平も亦諸平に学んでをり、すなはち胤平と同門といふことにな

る。一人は実に昵懇の仲であつた。紀州和歌山には居ること十年余り、  
 諸平から歌文を学び、撃劍の師範を専らとしてゐた。御一新後は武  
 の道を捨て、文の道に生きようと心に誓ふものゝ、明治二年十二月  
 には、越後国水原県の大属兼按察使大主典といふ要職に就き、その  
 後裁判官として山梨県に赴任する。同十年に裁判長、五十五歳の明  
 治十六年三月、山形県吏を辞す。官を辞した後は、上京し神田錦町  
 に居を構へ、明治二十二年に至ると結社一本社(のち権園社)を興し、  
 歌誌『わかむらさき』を創刊してゐる。これは、古今集の「むらさ  
 きの本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」(八六七・よ  
 み人しらず)に因む命名である。晩年は、門弟への歌学の教授に専  
 念し、作歌や評論に励んだ。門人としては、養女海上龍子が知られ  
 てゐる。また、千浪、胤平の両名に学んだ、淡路出身の政治家にし  
 て漢学者土居光華(弘化四年〜大正七年)の存在も逸することは出  
 来まい。光華は此の『詠史百首評論』を如何様に思つたのであらうか。  
 福羽美静・黒田清綱・高崎正風・本居豊穎・小出聚等御歌所派の  
 歌人を中心とした十四人の詠を収めた、平井元満の編輯にかゝる歌  
 集『東京大家十四家集』(明治十六年刊)に対する論難書『東京大家  
 十四家集評論』(明治十七年刊)が、胤平の初めて世に問うた著作で  
 ある。その後、鈴木弘恭が『東京大家十四家集評論辨』(明治十八年刊)  
 を著し更に反論を加へるなど、この処女作は歌壇に議論を引き起し  
 た一冊となつた。萬葉主義を標榜する胤平にとつては、香川景樹の  
 流れを汲む桂園派、御歌所派の詠む古今風の歌が気に入らなかつた

のである。所謂旧派和歌を攻撃（罵倒と言つたほうが適當か）した歌論書としては、この他にも『新自讀歌評論』（明治三十六年刊）、『八田知紀歌集評論』（明治三十七年刊）等を著してをり、矢張り胤平は明治期に於てきはめて特異な存在として注目せらるべき人物なのではないだらうか。萬葉主義を謳つたといふことに就ては、子規の淵源をなすものだと言へるかも知れないが、胤平の歌は旧派和歌の域を出でず、その論拠の乏しさゆゑか顧みられること稀であり、子規の場合は写生・写実による生活詠の実践といふ面もあるため、その名を高からしめてゐるのである。家集としては、『権園詠草』（明治四十三年刊）、『権園家集』（大正四年刊）が刊行せられてゐる。

逝いたのが、大正五年三月二十九日夜、享年八十八であつた。神田猿樂町二丁目の自宅にて最期を迎へ、郷里三川の海上家墓地に神式で葬られたといふ。歿後、歌誌『わか竹』が追悼号を出してゐる。今年（平成二十八年）、漱石歿後百年とはよく聞くのだが、胤平歿後百年の記念すべき年でもあるといふことを記しておきたい。

### 三

さて、此の『詠史百首評論』だが、その成立は夙い。卷末に「明治六年十二月廿一日浜町梅林亭にて、作者加藤千浪にあたへ」とあることから、千浪の『詠史百首』が刊行され（正確な刊行年時は未詳であるが）、程無く執筆したものとされる。明治六年、胤平は四

十五歳、山形県の裁判官をつとめてゐた頃である。『詠史百首』の歌は一首も整つてゐない、そのため多くの人々を惑はせることになるから、誤りを指摘して千浪に示した。しかし千浪、そしてその門人である伊東祐命からは何の返答もなく年月が経つてしまつた。そこで、そのまゝ埋れさせるには忍びないと吉野隆平、平塚義平のすゝめによつて出版した、と胤平は序文で成立事情を語る。

先に『東京大家十四家集評論』を処女作と記したが、これは出版の年月を以てしたもので、成立といふ点から見ると、此の『詠史百首評論』が胤平の第一作となる。明治六年に脱稿し、成立後や、時を経て刊行せられたに就ては、その事情を詳らかにし得ない。元々が公開することを前提とした述作ではないことも関係してゐるのではなからうか。

『詠史百首』に於る千浪の詠みぶりは、「拙劣なるものにして、これをとかう論ぜむことは却りておとなげなきにも似たる程のもの」との悪評もあつたのだが、胤平は平生抱いてゐる煩悶ゆゑ、批判しないではゐられなかつたのであらう。千浪の詠を語格、語法の見地から厳しく批判する。意味の汲み難い掛詞、俗語の使用を誡め、史実に違ふことがあれば糺弾する。その態度は、時代の趨勢を一切考慮に入れず、実に頑なである。そんな胤平の姿勢は、以下の如く描写せられてゐる。

翁が歌論、あるは粗に過ぎ、あるは陋に流れて、難すべきふしまた少なからず。殊に評論の性質、たゞ作品の瑕疵のみを求めて、

其美点を顧みざるの風あるはこれ決して平正なる評論とはいふべからず。

胤平歿後に執筆せられたものであるが、この言は当時の旧派歌人の多くが抱いてゐた思ひであるとともに、胤平の言説の本質を衝いてゐるのではあるまいか。『詠史百首評論』では、千浪を攻撃するだけにとまらず、千浪とよく交流のあつた江戸派の歌人井上文雄も亦、

此詞は俗歌者流の井上文雄などがいひはじめたるならむ。かれが教をうけたる人々の歌ををりく見えたり。此作者も文雄がをしへ子なればにや。さて、東国の歌のさ殊更にわろくなしたるは、文雄らがしわざとやいはむ。(94番歌評)

と檜玉に挙げる。口語・俗語を使用した歌を文雄は多く詠んでゐたせみであらう。胤平は、若年より剣術を学びその負けん気の強さゆゑか、論争は多く、「長歌改良論」(『筆の花』九号、明治二十一年九月)を著した佐々木弘綱に対しては、「長歌改良論辨駁」(同十五、十九号、明治二十二年三月、七月、同年刊)で応酬し、その後侃侃諤諤の議論が続く。歌学会の雑誌『歌学』一・二号掲載の範歌には、『歌学会歌範評論』『大八洲学会詠歌邪正論』(ともに明治二十六年刊)の二冊を刊行し、完膚なきまで旧派和歌を攻撃する。

#### 四

板本『詠史百首』と『詠史百首評論』との間には、歌の排列が前

後する等、異同が可なり存し、胤平が如何なる本を見て、『詠史百首評論』の筆を執つたのか非常に気にかゝる所である。「詠史百首のすり巻を見せられ」たと序文に記してゐることから、板本を実見したのであらうが、余りにも板本との違ひが多過ぎる。「朝臣」「卿」等の脱落した程度ならば、左程気にもならないのだが、和歌に於る表現の相違が二十三箇所となると看過は出来まい。成立の時期から見ると、胤平の指摘が板本の歌に生かされることはないはずなのだが、「四句深きこゝろ」といへる、此句深きこゝろ(よこし)といふべし。」(22番歌評)と言ふ胤平の批評を受け入れ、「ふかき心は」と改めたのではないかと思はれる箇所もあり、この点に關してはいさゝか疑問が残る。全体としては、歌の表現様式にのみ拘泥する議論の続く『詠史百首評論』であるが、その文学史的な意義は一先づ措き、所蔵機関を殆ど聞かないといふこともあり、こたび此処に翻刻、紹介出来た意義は多少なりとも認められるのではないだらうか。

#### 註

- 1 揖斐高「詠史の展開」(『懷徳』六十三号、平成七年一月)、『江戸詩歌論』平成十年、汲古書院所収)、中澤伸弘「幕末詠史和歌の展開と国学の影響(上・下)」(『國學院雑誌』九十七巻四・五号、平成八年四・五月)、高野奈未「詠史和歌の方法」(『歌学文学大系74』布留散東・はちすの露・草徑集・志濃夫廼舎歌集)月報、平成十九年、明治書院)

- 2 田代一葉「詠史和歌」(『和歌文学大辞典』平成二十六年、古典ライブラリー)
- 3 『詠史百首』に就ては、鈴木淳「樋口一葉と千蔭流」(国文学研究資料館編『明治開化期と文学』平成十年、臨川書店)に、書の方面からの論考が備はる。
- 4 本居豊穎「加藤千浪翁碑」(大川茂雄・南茂樹編『国学者伝記集成第二巻』昭和五十三年、名著刊行会)。碑は牛嶋神社(東京都墨田区向島一丁目)に現存する。
- 5 久松潜一「海上胤平」(明治神宮編『明治の歌人』昭和四十四年、短歌研究社)
- 6 海上胤平の伝記に就ては、「海上胤平翁略伝」(『わか竹』九巻五号、大正五年五月)、小嵐市恵「海上胤平」(『近代文学研究叢書第十六巻』昭和三十六年、昭和女子大学光葉会)、海上義治「海上胤平略歴」(『短歌研究』三十一巻六号、昭和四十九年六月)参照。
- 7 胤平の歌論に關しては、「胤平の論は観念的で何ら具体的に説明するところがないのである。」といふ指摘がある(大久保正「近代初期の万葉集享受―海上胤平と正岡子規―」『近代短歌研究』一卷一号、昭和三十六年五月、『万葉集の諸相』昭和五十五年、明治書院所収)。
- 8 『わか竹』(九巻五号、大正五年五月)。下田義照、春日敬三、井上通泰、大口鯛二、金子元臣、鈴木松園、武島羽衣が追悼文を寄せる。

- 9 鈴木松園「海上胤平氏の評論」(『わか竹』九巻五号、大正五年五月)
- 10 武島羽衣「歌論家としての海上胤平翁」(『わか竹』九巻五号、大正五年五月)

- 11 拙稿「井上文雄の田園詠」(『成蹊國文』三十七号、平成十六年三月)
- 12 「国立国会図書館サーチ」(<http://iss.ndl.go.jp/>)、[CiNii Books 大学図書館の本をさがす] (<http://ci.nii.ac.jp/books/>) での所蔵機関なし。

#### 【凡例】

- 一、底本は、架蔵本(明治三十七年刊、活字本)を用ゐた。
- 一、仮名遣ひは底本の通りとした。
- 一、漢字、仮名の使ひ分けは底本のまゝである。
- 一、漢字は概ね通行の字体に統一した。
- 一、清濁の別は一部示されてゐるが、新たにこれを区別した。
- 一、序文、評に句読点是用ゐられてゐないが、新たにこれを附した。
- 一、私に歌番号を算用数字で頭書した。但し、板本の排列と異なる場合は、板本の順を「」を以て示した。
- 一、改頁箇所に就ては煩雑になるため、特に明示はしなかつた。
- 一、明らかに誤植と思はれる文字に就ては、これを訂正した(○○郷↓○○卿、千裁集↓千載集など)。
- 一、板本『詠史百首』(大阪市立大学森文庫和古書画像データベース)

< [http://dlisw03.media.osaka-cu.ac.jp/info/lib/user\\_contents/mori/1672.djvu](http://dlisw03.media.osaka-cu.ac.jp/info/lib/user_contents/mori/1672.djvu) > 所収歌と異同がある場合には、当該箇所にも印を附し直後に（\*……）の形で板本の表現を記した。但し、漢字仮名の使い分け、異体字に関しては明記してゐない。なほ、板本のみに記されてゐる語句に就ては、当該箇所に「」を以て示した。

【書誌】

- 判型 B6判（縦十八・五糎、横十二・五糎）
- 装訂 一卷一冊 大和綴 茶色表紙
- 外題 「詠史百首評論 全」（中央）
- 蔵書印 「檜園柳澤氏蔵書之印」
- 頁数 四十四頁（本文一〇四十二まで頁数の記載あり）
- 架蔵

【翻刻】

詠史百首は加藤千浪がよめるなり。世の中広しといへど、此人に及ものをさくゝなかるべし、とて老たる若き人々褒くつがへり、我もくゝとより集ひ教を受ける人いくらか数しられず。おのれを得て一日語らばやとおもへるに、ゆくりなくも文雅堂のあるじ、千浪が著せる詠史百首のすり巻を見せられしかば、一わたり見もてゆくに一首もとゝのひたるものなし。今の御代にかばかりの人、教の親となり多くの人々をまどはする。そは道の為にくむべきことならずや。故あやまれるふしぐゝをことあげつるを、浜町の梅林亭の歌会の席に携ひ、千浪に逢て思ふ旨あらむには、つまびらかに其よし書加へよとてあたへたるに、答もなかりしかば、又かれが教子なる伊藤祐命へも別に送られたれど、一言のいらへもなく年月経にたりしを、うひ学の人々史をよまむたつきにもなるければ、あまねく世に示してよと、吉野隆平、平塚義平らがひたす、めにすゝむるまゝにかくものしつるになむ。

胤平

作者 加藤 千浪  
論者 海上 胤平

## 神武天皇

## 1 神倭ふみまし、より万世に動ことなき高みくらかな

百首巻頭の一首。その初句に神倭とあるは、神倭磐余彦天皇の御名をさして詠奉りしならむ。此句もて作者の分際しられたり。されば辨ふるまでもなきことながら、初学の為にいさゝかこゝに論ふなり。掛巻も畏き大御名を略して称奉るべきならねど、歌は文字の数定れるものなれば、略してもよむべけれど、此天皇を称奉らむには、磐余彦神の尊と称ふべし。例をいはゞ、息長たらし姫の御名をたらし姫神の尊と万葉に詠るがごとし。文字余ればとて息長とのみはいふべくもあらず。神倭とゝのみたゝへて神武天皇とはいかでかするべき。かくいはゞ大日本彦耜友天皇を大日本とたゝへ、雅日本根子彦太瓊天皇を雅日本とのみ申たてまつりてきこゆべきかは。そはいふも更なり。はたみことゝも天皇ともなく、たゞ神倭などいへるは、あやなきいひざまにて甚しき僻言といふべし。

## 神功皇后

## 2 日の本にあまる光をたらし姫人の国までたらはしにけり

万葉に、かけまくもあやにかしこきたらし姫神の命から国をこけたひらげて云々、またたらし姫神のみことの魚つらす云々、御名をたゝへたてまつらむには、かくこそまをすべけれ。さるを余る光をたらし姫などなめにかしこきいひざまならずや。四句から国とはなどいはずりけん。結句もよろしからず。たらしましけむといふべきをや。

## 日本武尊

## 3 ものゝふの鏡とも見よ大御名にかけのよろしきやまとごゝろを

物部の鏡とも見よといへる褒賞の詞ながら此尊を詠奉らむには、神ともあふげなどの詞なくてはふさはず。そはしばらくおきて、結句やまと心をとはいかゞ。川上臯帥が奉りしは日本武といふ御名にて日本心といふ御名にはあらず。作者は四句の懸のよろしきは、日本までに働らかしていへるなりともいはむか。さはいひがたし。詞も作意もつたなくていひかひなし。

橘媛

4 相模の海あらぶる浪の八重置しきしのぶにも袖はぬれけり

三句の八重置は浪の八重とかゝりてしきしのぶとつゞけたるは、作者の彩骨なめれど、人物の歌は其事実と詞の勢と相応せざれば、見処なきものなり。此時御船將に覆没すべき際に、御命を捨てたまへることなれば、きはめて烈しくいふべきを、八重置は安席なればおのづから句勢ゆるくて相応せず。さはいへ此作者の分際かく深くいふべきならねば、さてあるべけれど、初学の為に驚しおくなり。

雄略天皇

5 いかり猪もひざをりふせし御稜威よりたけき御名をも奉りけむ

二句ふみふせましとあるべし。かくいはずれば、いかり猪おのれと膝をりふせるになりて叶はず。此歌膝をりふせしみいつより云々とあるは、咭猪を踏殺し賜へるによりて、雄略といふ御諡を奉りしといふにや。そも詠史の歌よまむとならば、其かみのさまをつぶさに辨へてこそよむべけれ。かく疎漏にしていかでか詠得べき。殊にをさなければ、今是をいふなり。此天皇葛城山に射獵し賜ひし時一事主の神恐みて、有徳天皇と称奉りし事あり。こは三年の紀なり。次に咭猪を踏殺したまひしは五年の紀にて、懦弱の舍人を斬賜はむとせられしを、皇后の諫にて御ゆるし賜ひし事はあれど、此時御名にかけて称へたてまつりし事はあらざりけり。後に雄略の御諡を奉りしも、かの有徳天皇と称へし如く威徳猛烈の君なれば、雄略とは称しなめれど、猪のことによれるにあらず。さるを御稜威よりと詠ては、たゞ此猪にのみかゝりて誉奉るに似て、なか／＼にみいつを虧ものなり。畢竟史の事実疎くてたしかなる見解なきゆゑなるべし。

小子部須賀留

6 雲井まで其名もたかくとゞろくや手どりにとりしなる神のごと

なる神はかたちなきものなれば、手どりににはなしがたし。須賀留は雲獸をとりたるなるべし。されば鳴神を手どりにとりしとはいふべからず。

大職冠

7 [11] たはわざと人に見せて庭鞠にふかき心をとるかはしけむ

鎌足公の天智天皇にむつび初しは、法興寺の槻のもとにて打鞠の時、脱たる御杵をさゞげしより親み賜ひしなり。さるを戯業と人には見せてといはゞ、此庭鞠は入鹿のかたへ戯わざと見せむが為にはかりし事のやうに聞えて、事実違へり。若また御杵を捧しを戯業といはゞ、



甚しき誤なり。四句深き心も結句とりかはしといへるもふつゝかなり。

伊企儼

8 [7] いたづらにいきながらへばから国に大和心の名をたてめやも

大和心の名とはいかでかいふべき。こは詞のはたらきもしらぬといふべし。

大桑子

9 [8] を、しくも散にけるかなをみなへししらぬしらぎの風になびかで

大桑子かしこにて死たるなり。さるをしらぬしらぎとはいふべからず。

守屋大連

10 [9] 法の水せきとめかねてさかさまにながしゝ名こそかなしかりけれ

法の水いかなる処より流れ出たるにか、川などの詞なくては、せきとめもながしゝもかなわぬなり。またさかさまは卑より高きに流るゝをいふなり。さればせきとめてこそ逆にもながるべけれ。せきとめかねてとあるには、さかさまにながしゝとは理たがへり。

佐用媛

11 [10] つまこふる外にこゝろの動なきみさをよりこそ石となりけめ

つまこふる外に心の動きなき、といへるはいとくつたなし。四句結びみさをやりて石となりけむともいふべきなり。みさをよりこそ石となりけめとは、ことわり立がたし。

柿本人丸〔朝臣〕

12 あふげたゞ末の世にしも山柿の本のこゝろの高きしらべを

本の心といふことは、古今集に石上ふるから小野のものとかしはもとのこゝろはわすられなく、とあるごとく、境界はさまざま、転変るならひなれど、本性は忘れぬとなり。されば其人のたてたる本心なくてはもとの心といふこと詮なし。人丸いかなる本心ありけむ。僻言ならずや。そはしばらくおきて、此歌あふげたゞとあれば、鄙劣のしらべを捨て高尚の調をあふげとにや。されば勉て高き調を習ふべきを、自己の歌いかにぞや。百首のうち一首としてとゝのひたる歌なし。おのれをかへり見よ。

和氣清丸〔朝臣〕

13 すべらぎの神の御筋のたえせぬは君たゝれしによりてなりけり

清丸の筋をたゝれしによりて、神のみすぢの絶せぬといへるにや。いとふつゝ、かなるいひざまなり。道鏡を愛賜ふ御心まどひのあまり、いとあるまじき思召もありつれど、皇統の万世に絶たまふべきことわりならねば、清丸が別れしによりて絶せぬといはむは、なか／＼にかしこきいひざまなり。はた君がたゝれしとは、かりにては何をたゝれしに聞えがたし。そは二句の御すぢにかけて足の筋をきかせるにや。さては神の御すぢと足の筋と混合して、いよ／＼あやなきことなり。

田道

14 国の為消のこりたるたまのをの長き恨やおろちなしけむ

消のこりたるとある、こはなほ消えずといはざれば叶はず。結句おろちとあるは假字たがへり。さて、をろちなしけむとはいふべからず。なすは如くといふ意なり。田道の忠魂をろちとなりて、あだをなやまししたるなれば、をろちとなりけむ、とこそいふべけれ。さてはまた文字あまりてくちをし。長きうらみといへるもをさなし。恨に長き短きといふべくもあらず。

浦島子

15 玉くしげあくるくやしとなげきてもかへらぬ水のえにこそ有けれ

あくるくやしとは現在なり。さては叶はず。こゝにてはあけてくやしきと有べし。また水のえをいはむとて、かへらぬ水のえになどいへるは、いとつたなし。

聖徳太子

16 人の世はたゞさめぬまの頼みぞと夢どのをさへ作りましけむ

人の世はたゞさめぬまの頼みぞとある、こは作者の意は衆生不覺の世を頼むならむ。されば夢殿を作りてきとしたまふといふにや。覺不覺の語は仏教に専らいふ言なれば、此皇子を詠奉るにはよき詞なれど、例のいひなしたなくて紛らはし。

忌部広成〔臣〕

17 人の世にとほき神代のかたりごとこそ書つたへけれ(＊けれ)

趣意は聞えたれど、いひたるまでにて差略もなき歌なり。四句こそは君こそなぞいとをさなし。

久米仙人

18 をみなへしなまめくのみか花妻のはぎにもおつるものところしれ(\*みれ)

僧正遍昭の歌を思ひかけたるなめれど、つたなくていひかひなし。萩の花妻とこそいへ、花妻の萩とはいかでかいふべき。脛をいはんとてかくもてつけたるにや。詞は心にまかせていはれぬものぞ。四句語をなさず。此歌は久米仙人をよめるなれば、詠史歌集といへるものに入べき歌ならず。

菅原(\*菅) 贈太政大臣

19 雲井にはすみはてねども折えたる月のかつらは今も匂へり

折えたる月の桂とは「久かたの月のかつらもをるばかり家の風をもふかせてしがな」、この歌によられて大臣の学徳、今の世にも匂ひたりといふなるべし。其意はしられたれど、月の桂を折えたるにあらねば、空言なり。さて此大臣を詠むとならば、かばかりのことにては叶はず。大方の学生とひとつにおもふべからず。

檜垣老女

20 水上のふかきころはしら河にながれてこそはくみしられけり(\*けれ)

水上はあさくも末は深きなどこそいへ、水上の深きといへるは、詞にあやなくてふさはず。されば水上のきよき心ともいふべきか。またころはのは文字、四句のこそはのは文字かまし。三句のしら河、結句のくみしられ、そもうるさし。

紫式部

21 むらさきの根なし草とも見へざりき(\*見えぬかな) 花も実もある筆のすさびは

浮草の根なしなどこそいふべけれ。紫の根なし草とはいかにぞや。四句褒賞の詞なれど、筆のすさびに花も実もあるとはいひがたし。みだりならずや。

清少納言

22 巻あげしをすの外山の雪にこそふかき心の(\*は) 顕れにけれ

簾まく、すだれからくるなど古人のいへるは優なり。まきあげしとあるは、いやしきことばなり。歌は詞正しく高尚によむべきものぞ。四句深きころのといへる、此句深きころ(ハ)はといふべし。

文屋康秀

23 中々に身におはざりしことの葉の錦や人の目にとまりけむ

古今序に、詞たくみにして其さま身におはず、いはゞ商人のよき、ぬ着たらむが如しとある、これによられたりや。一首のうへ、こと葉いやしくて錦もよしなし。初句中々にも叶はず。身におはざりしことのは人の目にとまりたらむには、やさしかるべきを作者のごとくいひては、一首の趣意とほらず。

崇徳院

24 つれなくもせきかへしたる水茎のあとの恨にしづむ君かな

前にいへる、法の水せきとめかねて云云といへるごとくにて、此歌水ぐきとあるからに、せきかへしたるなどいへるにや。ことはたらぬなり。水茎の後とあるは、御経なれば、たゞ水茎とのみにては心ゆかず。はたあとの恨といへるは語をなさず。後とはいはゆる筆のあと、墨のあとにてむかしの跡なれば、こゝには叶ず。

源頼義朝臣

25 みなもとのさかえしられておのづからわき出にける岩し水かな

三句おのづからといふ詞叶はず。頼義朝臣が弓もて突たるに、清水のわき出ぬをよめるなるべし。されば、そのさまなくては詞たらはできこえがたし。

源義家朝臣

26 とゞめおく言葉の花にみちのくの関のなこそは高くなりけれ

結句俗調なり。高くしらるれとこそいふべけれ。さてしも関の歌になりて、題にかなはず。

安部貞任

27 ほころびむ衣のたてをしばらくは縫とゞめたり糸のみだれに

ほころびむは、いまだしからざるほどの詞なり。此時は既に破れたるなれば、ほころびしといふべきなり。はた糸のみだれは其時の詞ながら、乱れに縫とゞめたりとはいひがたし。一首の意此歌にては、暫く衣の館をとりとめたるが如くいへれど、たゞ一身をのがれしまでにて、衣のたてを防留たるとは異なれば、きこえがたし。

左馬頭義朝

28 情なく親をうつ身のはて見てもまさしくむくひある世なりけり

情なくなど、こゝにいふべき詞かは。二句うつ身のはとあるは叶はず。こゝは、うちし身といふべき処なり。三句優ならず。四句も結局もいとまだしくて、見処なきなり。四句むくひは假字たがへり。むくいと書べし。

〔源〕為朝

29 中々につらなる枝の梢のみ射たるあだ矢もこゝろありけり

連枝といへる熟語を強て詞にとりなして詠るなめれど、国語ならねば、歌によむべからず。又枝の梢とはつゞくべき詞ならぬをや。詞のうへにては、為朝が木の枝を射たるになりて、冑を射たりとはきこえず。あだ矢も例なければ、戯言なり。

源頼政〔卿〕

30 梓弓とる方のみか言の葉の右にも出る人なかりけり

万葉集に左手の弓とるかたといふ詞あり。それによりて、梓弓とるかたのみかといへるにや。左に対して右といひて、文武ともにすぐれたるよしの作意なめれど、弓とるのみかといはで、とるかたのみかといへるは、弓はたゞ左手をいはむ料のみにきこゆなり。かくては、左手のすぐれたりといふになりて、ことわりたちがたし。

安徳天皇

31 世の中をてらしもはてずわたつみの浪の入日のかげぞかなしき

日の入は、終日世をてらし、のちならずや。さもなくては、此日西より出て西に入るさまにて、いとあやしげなり。かくことわりにたがへるは、いかにぞや。

平相国

32 時を得て雲をしのぐ老松の梢もつひに浪のした草

二句しのぎしといはでは叶はず。梢に子孫ふくみて、西海に没落せしをよめるなめれど、かくいひては、相国浪底に沈みしごとく聞えてかなはず。はた子孫を梢といへる例もあるまじく、浪も俄に出てよせなし。した草も心ゆかず。

平忠度〔朝臣〕

33 ふるさとの花のにほひにかくしたる名も千載にぞ顕れにける

かくしたる名とは誰がかくしたるか。忠度は自ら名をかくしたるにあらず。勅勘の身なればとて、読人しらずと俊成卿の千載集に入たりといふことあり。そをいへるにや。されば名は千載にあらはれたるなり。此歌は『さゝなみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山桜かな』とよまれたるによれるなるべし。さるを、たゞふるさと、のみよまむも口をし。また花のにほひにかくしたる名とは語をなさず。

小松内府

34 有て世のはてをば見じと散にけむまがる老木の花を見すて、

有て世の中はてのうければとあるによられたるなめれど、はてをはなといへる詞いといやしげなり。はては見しとやなどいふべし。二句はてをば見じと、結句花を見すて、見文字二ツありてうるさし。老木の花といへるからに、三句の散にけむと活かしたるなめれど、人の死ぬるを散とはいふべからず。また花といふこと、清盛にはふさはしからず。

二位尼

35 あら玉のま玉つゝみてわたつみにしづむころものうらめしきかな（\*うらめしの世や）

初句冠辞とも見えず。塵璞の真玉といへることよしなし。沈む衣もあやしむべし。かくいひては、衣が玉を包みて海底に沈たるに聞えて、不束なり。衣もて玉を包むは、人なるべし。されば、沈む衣とはいかでかいふべき。あさましき世の姿になり行たるは誰かなしけむと、其もとを思ひて其人をこそ恨むべけれ。たゞに衣をうらむにや。衣口あらは何とかいはむ。

五条三位

36 桐火桶あたりの春ののどけさに君が言葉の花咲にけり

かくいひて桐火桶のあた、まりにて、三位のよき歌の出来たるやうなり。拙劣笑ふに堪ず。

能登守教経

37 引しぼる君が矢先に立むかふあだは波間のもくづなりけり

初句引しぼるとは俗なり。引放つとはなどいはずなり。あだは波間のもくづとは、あやしむべし。かくいひては、もくづが化てあだとなりたるにきこゆなり。あだは波間のもくづとなるらむなどあるべきを、みだりならずや。

平経正

38 四の緒にこゝろをこめし青海の浪こそ終のとまりなりけれ

四の緒にも心をこめ、また青海にもこゝろをこめたるにきこえて、いとまぎらはしきいひざまならずや。かくては趣意とほらず。青海は青海波といへる曲名によられたるなめれど、波こそつひのとまりとは解がたし。

平康頼

39 あはれともくみはしられじ水ぐきのながれてかへるあとなかりせば

水茎は墨跡なり。されば、ながれてかへるとはいひがたし。結句例のあと、いふこと叶はず。

僧都俊寛

40 友千鳥あしずりしてもかへされぬうらみはもれし後にこそあれ

千鳥のあしずりとは笑ふべし。三句かへされぬといへるもをさなし。四句うらみはもれしとあるも叶はず。結句例の跡もつたなし。何ごとをかひひ出けむ。此作者後といふ癖有て、ともすれば何々の後出くれど、大かたがへり。

能因法師

41 旅衣きてもみざりし白河の関にその名は猶とゞめけり

そのといふ詞は上にあることをさしていふべき詞なり。されば、こゝにては叶ひがたし。

源頼朝〔卿〕

42 立さわぐやしまの浪の引かへてにはよくなりぬ鎌くらの海

初句立さわぐといへる、こはさわぎしとあるべきを、文字あまればかくいへるなめれど、みだりなり。二三句やしまの浪の引かへてとはいかゞ。浪にとあるべし。

木曾義仲

43 うし車のりちがひしや粟津野に身も落ぬべき始なりけり（\*なるらむ）

牛車のりちがひしやとは俗調なり。身もおちぬべきはじめとは、こゝろゆかず。一首のうへ解がたし。身ものも文字もおちつかず。

源義経〔朝臣〕

44 さかしらのなき名にぬれし衣川身の沈むべきところなりけり

濡衣といふことを、衣川に活用したるなめれど、さかしらのなき名にぬれしとは、語をなさず。結句しつむべきところなけりといへるも拙なくて、見るにたらず。

妓王

45 今さらに思ひほどげばうれしきを鬼かとのみもうらみけるかな

二句おもひほどげばとはいはれず。解といふを仏にいひかけたるにや。いひかけたる詞もいひなしによりてはみやびなるべけれど、わろくもてつけたるは、口軽にいやすく、狂歌などのやうにてきゝぐるしきものなり。此作者いひかけをむねとせられたるにや。数々ある中に一ツとして優なるはなし。たゞものしらぬ人の耳をよろこばすまでなるべし。

佐藤嗣信

46 〔47〕やしまがた命を的とかねてより思ひしらずばくやしからまし

命を的といへるは俗調なり。しかのみならず、其他も分らぬいひぎまぞかし。凡武士の軍に出るに、いのちを捨ることはかねてより思ひ定めたる事なり。況や嗣信のごとき益荒雄をや。かねてよりおもひしらずばなどいふも更なり。悔しからましといふべきことかは。

佐藤忠信

47 〔46〕生死をうちあらそひしみだれ碁にかけしは君が命なりけり

あらそひしとあるはいかゞ。こはあらそひてとせねば叶はぬなり。かくしても、また事実たがへり。みだれ碁に命かけたるにはあらざるをや。

梶原景季

48 もろともにちらばちらむとさしそへてえびらの梅に名は(\*)もにほひけり

簸に梅をさしたるは父の景時なれど、世に景季といへばさても有べし。二句ちらばちらむといへるは叶はず。三句そへといふこと用なし。梅ともろともにちるは何ぞや、景季なるべし。人の死ぬを散るとはいふべくもあらず。近世のえせ歌にかゝるたぐひ多かりけり。心すべきものぞかし。四五句も拙し。名は句ふといふべからず。



法然上人

49 さまたぐに別れし法の道のおくふもとなしてとき広めけり

道のおくふもとなしてとは、無下に物しらぬいひざまなり。ふもとは山の下なるをや。山の奥といはゞこそあらめ。道のおくふもと、はいかでかいふべき。道の奥に対しては、口といふべき格なり。かばかりの事も辨へぬは、いかにぞや。

文覚上人

50 思ひきやこゝろにかけし人の名を身の上にさへおはむものとは

四句うへさへも叶はず。結句おはむも不束なり。

小督局

51 かぎりとして弾やなみだのつまごとも嬉しきふしにかはる笛竹

何々の限とこそいふべけれ。たゞ限とばかりにては、何の限かしりがたし。なみだのつまごとは、無下にをさなくいはれたり。こは語をなさず。以下もふつゝかなり。嵯峨野のこともなくて見処なし。

辨慶

52 君をさへうちかはりつゝ関の戸をこえしは筆の力なりけり

初句は富樫のみか、君さへはかりしといへるにや。君をはかりしにあらねば、事実たがへり。二句つゝとあるも用なし。三句関をこえしといふべきを、文字たらねば、関の戸といへるにや。四句筆故なく出たり。いとみだりなり。

斎藤別当実盛

53 染かへしかしらの雪のそれならで水にも名をばすゝぎつるかな

初句染かへしといへる詞、心ゆかず。実盛は白髪を黒く染たるなり。頭の雪といひては、黒髪を白く染るになりて、事実たがへり。四五句水にも名をば云云、をさなきいひざまならずや。

西行法師

54 言の葉の道もいたらぬくまぞなき杖と笠とに身をまかせつゝ

四五句今少し丈高くあるべし。此歌後の俳諧者流などのさまにて、此法師には相応せず。

那須与市宗隆 (\*那須宗隆)

55 弓矢には世にたけたりし (\*たぐひなし) 家の風扇よりこそ吹はじめけれ

初句にはとあるは、きこえぐるしき詞ならずや。世にたけたりしもむづかしきいひざまなり。たけといふ詞は、世にも家にもよしなし。されば、こゝには叶はず。さて与市が弓矢、此扇より初たるやうにていとまぎらはし。宗隆は宗高なり。一首のうへ扇射たるさまなくてきこえがたし。

常磐前

56 鎌倉や鶴が岡べに千代よぶもまつが常磐の陰にざりける

常磐の松とこそいへ、松が常磐とはいかでかいふべき。前に見えたる花つまの萩とよめるにひとしくて、いひかひなし。

静女

57 思ひかね立まふ袖の雪にさへしたふこゝろのあとは見えけり

おもひかねといふ詞は、思ひにたへかねてといふことなり。そは古歌に見えたる、おもひかね妹がりゆけばなどの如し。さて静が鶴が岡の舞は、止事を得ざるにて、われとおもひかねて舞るにはあらず。作者此ことがらも心得ずして詠るにや。また例のあと、例のさへ並び出たり。

曾我兄弟

58 狩衣すそ野の露も (\*と) 消たれどその名はともにふじの高山

三の句いといやしげなり。消しかど、はなどいはずりけむ。四句も結句も、初学の口つきにて論にかゝらず。

大磯虎

59 ひとめをもおもはでさし、蓋にふかきこゝろはくみしられつ、 (\*けり)

初句二句ともにいやしといはむもさらなり。蓋にふかき心などをさなし。結句つゝも叶はず。

佐々木高綱

60 おくれじの心の駒や立ばなの小島が崎にたちかはりけむ

高綱がうづ川を渡りたるにあらずして、心の駒が梶原におくれず、小島が崎にゆきたるに聞ゆ。結句たちかはりけむとある此詞もふつゝ、

かなり。

鴨長明

61 みちぬればかへるならひの世を捨て半の月やもてあそびけむ

巴女

62 身ひとつはをしまざらまし粟津野のはらに小松のたねなかりせむ\* (\*ば)

四句はらに小松とは、つたなき極なり。かくいひては、巴小松の程をはらめるにきこえて、あやしむべし。

朝夷奈義秀

63 朝日かげさすがの人のたねなればこの名もよゝにかゞやきにけり\* (\*けむ)

二句さすがといふ詞は叶はず。四句この名もとあるもをさなし。さて義秀は、和田義盛の子、或は義仲の子ともいへり。そはしばらくおくべし。一寐の口つきいやしくて、見るにたらず。

秩父重忠

64 君ならでこゝろわけぬをいかなれば二股川にいひしづめけむ

君に対して二心なきよしへるなめれど、君ならで心わけぬをといひては、君に心をわくるやうにて、まぎらはし。君をおきてともいふべきにや。又わけぬとあるも叶はず。二股川にいひしづめけむとあるも、ふつゝかなるいひざまなり。

上総五郎兵衛忠光

65 くやしくもみ出されけり身をかへてうき身\* (\*め)をさへにいとほざりしを

二句しられるかなといふべきところならずや。三四句身をかへてうき身をさへなど、よくも聞えず。作者さへといふ詞の癖ありて、や、もすればいへり。そはあたらぬかちなり。此歌うき身の外に何事か有けむ。副の意味はず。すべて見るにたらず。

青砥藤綱

66 此河のせにうづもれぬ君が名はとこなめにこそ世にながれけれ

二句せにとあるは、銭にきかせいへるなめれど、つたなし。うづもれぬとあるも心ゆかず。こはうづもれずとあるべし。四句とこなめのところはなごそつゞけいふべけれ。とこなめに世にながれ云云とは、ふつゝかなり。名はあくゝる、しらるゝ立べし、残すなどこそいへ、

ながすとはいふべからず。されど、悪き名なれば、ながすともいふべし。

後醍醐天皇

67 雲のまでめさげたまひし駒の名の龍の悔こそ君もましくれ

駒の名の龍といへるは、ひがごとなり。する墨、青海波などの如く龍と名づけし駒にあらず。さて悔こそ君もましくれ、かやうの処は、君はましけめといふべきなり。決定していはむは、思きかたもあれば、推はかり奉るかたによむべきものぞ。此作者の疎漏なるをまさでいはむもなかくなれど、因に初学のためにいふものなり。又龍の悔といひしは、易に亢龍有悔云云とあり。それによられたるにや。此頃は後醍醐天皇御即位あらせられたるを悔たまへるに聞えて、事実相違せり。

大塔宮

68 きえにける秋の霜こそかなしけれしこの醜草おきもからさで

秋の霜といへるは心ゆかず。霜は草木をからすものにて、人のよろこばざるものなり。されば、此宮を霜に準らへたるは、ふさはしからず。

准后親房所 (\*卿)

69 五十鈴川ながれの末の (\*も) にごらぬはくみしる君のあればなりけり

くみしる君のなからむには、にごるやうにきこゆなり。さてはくちをし。あさはかなりや。

尹大納言師賢所 (\*卿)

70 木がくれし君がもぬけのから錦こゝろにさへもきたる君かな

師賢卿天皇の大御身にははらせたまひて、天皇の御衣を着、叡山へ行幸すとて、出たゝせる其時のことをいへるにや。木がくれしといへるはよしなし。また、君がもぬけのから錦も心わからぬいひざまならずや。心にさへも云云、いかなる意にか有けむ。了解しがたし。また、君といへること二ツありて、そもぎゝぐるしきなり。

中納言藤房卿

71 月かげの鷹の巢山にいりしより雲井はくらくなりにけるかな

建武二年三月十一日、八幡行幸の供奉を限として、北岩倉と云処に赴き、不二坊法一と云僧を戒師として、遂多年拝趨の儒冠を解、法躰となりしこと太平記に見ゆ。又吉野拾遺に畑時能鷹巢山より帰りて、新田義助にいふ、山中僧に逢、其面藤房卿に似たり云云。若是を卿

としても、此時はじめて世をさけたるにあらざれば、此歌の如く、たゞちに鷹巢山に入たるやうにいひては、叶ふべからず。事実も辨へず、みだりに虚言をいへるなるべし。

千種忠顕卿

72 北風に野べの千草はかれたれどこゝろの花はいまもにほへり

三句かれたれど、いへる、例の口ぐせにてげすくし。こゝはかれしかど、いふべし。なほあなぐりいはむには、野辺の千草は枯れたれどにては、心の花に打あはず。千草はたとへていへる詞なり。こゝろの花はたゞごととなり。たとへ歌とたゞごと歌と差別あるべきを、此歌のごとくいひては、躰をなさず。近頃詠史の歌にかゝるたぐひ少からず。

源義貞朝臣

73 剣太刀神もうけひく汐干がたかちわたるべき初なりけり

汐はひくといふべくもあらず。しかるを、近世の俗歌に此詞ををりく見ゆ。うけひく汐干がた歩わたるべきとよめるは、軍に勝わたるにきかせたるなるべし。されど詞たらはで、さは聞えがたし。詞のうへにては、汐干がたにて、戦たるは勝わたるべき始なりけりとの意にてきこゆるなり。さては事実たがへり。二句三句つゞきよろしからず。此歌稲村が崎などの詞なくては叶はじ。

楠正成朝臣

74 たちはなの花散しより五月やみおぼつかなくも世はなりにけり (\*ける)

正成卿存在の時より世はおぼつかなきを、かくいひては叶はず。此卿存在の時治世ならばこそ、事実も考へなく、いとみだりならずや。

楠正行〔朝臣〕

75 なり出む身をばおもはず散にけり親の教の庭のたちばな

初句二句とも心ゆかず。四句教の庭とはいひがたし。庭の教とこそいふべけれ。これも前に見えたる、花つまの萩、松のときはなといへるたぐひにて、僻言なり。

北畠顕家〔卿〕

76 あらき風ふせぎかねつゝあへなくも安部野の露と消し君かも (\*はも)

かくいひては、顕家風をふせぎかねて、露ときえたるにきこゆなり。さてはことわりたちがたきいひざまならずや。顕家は軍をふせぎか

ねたるなり。此歌も亦たゞごと歌にあらずな。うらへ歌にあらず。躰をなさぬとこそいふべけれ。

日野資朝卿

77 世の人のしらぬためしに曳犬のむくつけき世を君ぞいさめし

猿犬を曳せたるは、一時の戲謔なり。詠史の歌にて此卿をよまむには、今少し大けき事があるべきなり。そはとまれ、二句しらぬためしといへる、こは心ゆかず。また初句よの人云云、四句むくつけき世云云、一首のうへによといふことふたつありてうるさし。

日野河新丸

78 おのづから靡きし竹のこの道を尽すこゝろを神や守りし

竹は自らなびきたるにあらず。また竹のこの道ともてつけたるも、前の巴をよめる歌に、はらに小松といへるたぐひにてつたなし。一首のうへ、堀をこゆるさまなくては詞たらはで叶ふべからず。

名和長年

79 にごりなき水となりつゝ君をしもやすきにおける舟上の山

水よく舟を浮ぶるといふ語によりて、船上山を詠るにや。そはよろしかれど、水となりつゝといふ詞いかにぞや。かくては、長年がをりくゝ水となりたるやうにきこえていぶかし。つゝといへることも叶はぬなり。此時からくして、敵を防ぎし軍なれば安きにおけるもふさはしからず。

児島高德

80 人しれず書から文字 (\*うた) の心をも君はうれしとおもひときけむ

二句書しといふべきを、文字あまればかくから文字とはいへるなるべし。かくては、とゝのはぬなり。結句おもひときけむといひては、語をなさず。

村上義光

81 君が為散やよし野の花やぐら高き其名はかくれざりけり

君が為散とはいふべからず。君がためとあるには、死ぬとこそいふべけれ。躰をなさぬいひざまなり。三句花何といふこと数々あれど、花櫓といへる、こは杜撰なるべし。例なくとも、よみてよき詞ならばこそ。

菊地寂阿

82 今も世の人のなみだのかゝるかなつまにとつみしことの葉草に

四句くるしきいひざまなり。つむ、或はひろふなど他にあるものに対して、いふべきなり。そは集むる意なり。寂阿一首の自詠をおくりたるなれば、つむとはいふべからず。

結城道忠

83 なき世にも西をねがはぬ丈夫は南にのみやこゝろひくらむ

なきよにも西をねがはぬとは、あやしきいひざまなり。世になき人の願ふ、ねがはざるをいかでかしかるべき。さて、西をねがはぬとは、いかなる故ありてかおぼつかなし。又西東北南など対すべけれど、西南の対もことほりならず。

兼好法師

84 見ればかつつれぐならぬ言の葉（\*ことぐさ）は広き学の窓につみけむ（\*けり）

初句かつといへるは叶はず。見ることにとか、見るからにとかいふべし。

葉師寺公義

85 今はとて思ひすてたる梓弓ひかぬ其名もよにひゞきけむ

とるはうしとらねば人の数ならず捨つべきものは弓矢なりけり、此歌によられたるにや。思ひすてゝといひたらむには、ひかぬなどうちあふべけれど、捨たるにては、次へのかゝりいかにぞや。きこゆべからず。またひかぬその名といへるも語をなとす。

塩谷高貞

86 かさねぬはうれしけれども小夜衣つまは我身のあたとなりけり

一二句かさねぬはうれしけれどもなどをさなし。さて、師直こそはあたなれ。操たゞしき妻をさしてあたといふべきことかは。ことわりしらぬいひざまならずや。高貞の心には、さはおもはざりけむ。作者よ、おのが僻心にくらべいふべからず。詠史は、正しき歴史を見てよむべきものぞ。

本間重氏

87 魚さへも(\*に)とりもはづさぬ矢先にはわだの岬に立人もなし

魚さへもとりもとは、魚も鳥もといふなめれど、魚までとらむとの心ならねば、例のさへの詞詮なし。和田の岬に立人といへるも大空なり。

小山田高家

88 小山田や青かる麦をかりそめの情にさへも身をぞ捨ける

仮そめといふ詞をいかに心得て詠るにか。高家軍令に背きて、つみなはるべきを助けられし大恩義によりて義貞を救ひ討死したるなり。豈かりそめの事ならめや。此作者いひかけを第一の巧とする癖にて、事実の軽重をも省ぬものなるべし。詠史百首など、名のみことぐしくて其見解かくなむある。四句例のさへたがへり。

新田義興

89 おもひきや矢口のわたし舟人がたばかりごとこのらむものとは

舟人がといへるは叶はず。こゝは舟人のといふべきなり。

上杉謙信

90 春日山おろす嵐に甲斐が嶺の雪もたまらずなだれけるかな

春日山は上杉氏の城山にて、小高き山なり。さて、信濃の一国をへだて、あるを其山のおろし烈しきまゝに、甲斐が嶺の雪もたまらずなだれけるなど、処も辨へず、いとみだりなり。四句たまらずといふ詞も叶はず。甲斐が嶺の雪ふさはしからず。越の国には、雪も相応ずべし。

武田信玄

91 弓矢には世にたけたりし家の風この世に絶むものとやは見し

二句にも四句にも、世文字ありてうるさし。さて、前に奈須与市をよめるに、弓矢には世にたけたりし家の風扇よりこそ吹はじめけれ、と見えたり。此作者例の癖にて、武田を世にたけたりといひひたるならむ。そは弓矢とりては、世にすぐれたりとの意なるべけれど、たけたるとすぐれたるとは、意味ことなり。四句この世にたえむといへるもさなし。結句ものとやは見しとあるもいかゞ。風は目にかゝらぬものなれば、見しなどいふべからず。こゝろみにいはむには、ものとやはしるなどこそいふべけれ。



今川義元

92 降しきる雨にくづれて桶はぎまた、へし水もたまらざりけり

雨にくづれたるは何ぞや。詞のうへにては、桶ときこゆるなり。雨に桶のくづれしとは、ものくしきいひざまならずや。結句たまらざりけりといふ詞も、叶ふべからず。水のたまるは、少なきより多くなる意なり。四句た、へし水とあるには、残らざりけりといはざれば、語路つゝかず。詞不束にて、論にかゝらず。

豊太閤

93 日の本にさるものありと犬じものから人さへもかしこみにけり

何がしの御内にさるものありとしられたりなど、軍ものがたりによく云俗言なり。かばかりの詞もて豊公にかけていふべき事かは。猿といはむとて、詠るは例の大小優劣のけぢめも辨へざる僻言なり。又猿に犬がおそれたるやうにもきこえて、いとくわりなきいひざまならずや。

柴田勝家

94 露ばかりのこさぬ水のいさぎよき心はかめのかゞみなりけり

水は清きなどこそいへ。のこさぬ水のいさぎよきなど、つゞけいふべくもあらず。かめのかゞみとは、亀鑑と云熟語を強て詞にいひなせるものか。杜撰ならずや。さて、此詞は俗歌者流の井上文雄などがいひはじめたるならむ。かれが教をうけたる人々の歌にをりく見えたり。此作者も文雄がをしへ子なればにや。さて、東国の歌のさま殊更にわろくなしたるは、文雄らがしわざとやいはむ。熟語を詞とさせるむかしよりある事ながら、そも詠なしによりて、よきもわるきもあれば、口にまかせてはいひがたきものぞかし。近きころ、水鶏を水のはにとりよめる人ありて、さは木兔を木のうさぎとも詠むべきかと笑草にいはれたり。いはゆる亀鑑とは、亀と鑑とを合せていへる熟語なれば、亀の鑑と詠べくもあらず。是も前の猿とおなじく、瓶といはまほしくて、事実を辨へざるものなり。

加藤清正

95 鬼とのみおもひの外の情さへあればや人もなびきよりけむ

鬼とのみ思ひの外など、いとつたなし。見るにたらず。

明智光春

96 からさきの松の木陰にのりすてし心の駒もよにすぐれけり

からさきの松の木かげになどくだくし。はた乗捨し心の駒もとは、いかにぞや。かくては、駒のすぐれたるに光春が心もすぐれたりといふになりて、主客たがへり。

佐久間盛政

97 ものゝふは鬼こそよけれみだれたる世には仏も何にかはせむ

鬼佐久間といへるにつきて詠るなるべし。さて、四句佐久間によしなし。はた盛政ごとき、いはゆる匹夫の勇なるもの何の称美かあるべき。

真田幸村

98 いくたびか\* (\*も) よせくる波をうちかへしなにはのあしの花と散けむ (\*けり)

かくいひては、幸村が浪をうちかへしたるになりて、あやしきいひざまなり。あら浪のよせくる敵をなどあるべきか。さてまた、幸村をあしの花にたとへたるは、似つかはしからず。

石田三成

99 しばらくは石田の水もおちざらむうら切とほす人なかりせば

四句うら切とほすとは、きゝとりがたし。田にうらといふべき縁語なし。戦にうら切といふ詞あれば、かくもてつけたるなめれど、こゝにはいひがたし。

木村重成

100 いまはにも心をこめしたきものゝ香ぐはしき名は世に匂ひけり

初句いまはにもとあるは、句勢なし。今はとてといふべし。一首のうへ曹といふことなくては叶はず。此歌のごとくいひては、いつもたきものにのみ心をこめし人のやうにきこえて、重成とはしられがたし。又結句名は匂ふべきものにあらず。此詞も不束なり。

集中三句切、又一句独立せざるなど多けれど、此作者の分際、さまで深くいふべきならねば、ことあげせず。

此巻は、明治六年十二月廿一日浜町梅林亭にて、作者加藤千浪にあたへ、又翌年一月森照治をして、千浪が教子伊東祐命が方へ思ふ旨あらば其よし書加へよとおくりたるなり。

詠史百首評論(終)

〔奥附〕

明治三十七年三月一日印刷

明治三十七年三月三日發行

著作權  
所有

定價 金拾五錢  
郵税 金弍錢

東京市神田区裏猿樂町二番地

著者 海上胤平

東京市下谷区上根岸町百十番地

發行兼印刷社 宮澤睦佐

東京市神田区佐久間町一丁目十九番地

印刷所 共成舎

東京市下谷区上根岸町百十番地

發行所 文学書院

東京市神田区佐久間町一丁目十九番地

發售元 共成舎

東京市京橋区南伝馬町一丁目十二番地

特約販売所 吉川半七

東京市神田区表神保町

同 中西書店

東京市神田区裏神保町六番地

同 光風館

(すぎき・りよう 東京都立第三商業高等学校教諭)